

萩

Vol 15

ものがたり

桂

写真集

小五郎

一坂  
太郎

H2  
カ



シリーズ

萩

ものがたり ⑮

写真集

桂  
小五郎

一坂 太郎



## 目次

はしがき

第一章 誕生から京都周旋	4
第二章 華々しく活躍	15
第三章 但馬潜伏	24
第四章 生彩を失った晩年	50

表紙 桂小五郎肖像写真  
裏表紙 桂小五郎書物々逸(春風文庫蔵)

「うめと桜」時に咲きしきし花中のその勇男 松菊生

## はしがき

幕末、長州藩が危機に瀕した時、桂小五郎は身分を偽り十カ月ほど山深い但馬国(現在の兵庫県北部)に潜伏した。古来、幾多の落人の生命を救って来た但馬人には、小五郎を受け入れる度量があったのだろう。やがて小五郎は維新の元勳「木戸孝允」として、燦然とその名を輝かすことになる。小五郎を助けた但馬人たちにとり、それは誇り高い歴史となった。いまも但馬地方に点在する小五郎ゆかりの石碑は、その証だ。

特に小五郎が出石城下で開いた荒物屋の跡に建つ石碑に「再生之地」とあるのが、感慨深い。全国的に見ても、珍しい文言ではないか。「逃げの桂小五郎」と揶揄されたように、小五郎は危機が迫ると、つまらぬ意地を張ることなく逃げた。だからこそ「再生」し、大きな仕事を成し遂げた。

いまの日本の政治家に必要なのは、小五郎のような良い意味での「するさ」だと思う。たとえば「絶対に戦争をしない」「戦争に巻き込まれない」「するさ」である。いくつもの修羅場を潜って来た元勳たちには、そんな「するさ」があった。それが失われた時、耳障りのよい、力強い言葉に引っ張られ、日本は暴走し壊滅した。昨今の日本のリーダーたちの発言には、悪い意味の「するさ」か、薄っぺらな力強さしか感ぜられないのは恐ろしいことだ。

いまこそ小五郎の「するさ」を、検討し学ぶべきとの思いから、私はこの小冊子を著した。三章の但馬潜伏がメインなのだが、それだけでは小五郎の生涯が分からないので、前後も簡潔だが加えた。小五郎こと木戸孝允については評伝を書く仕事を別に引き受けており、来年あたりに出版予定なので、そちらも併せて読んでいただければ幸いである。

取材にあたり、出石町づくり公社の堀川妙子さん、城崎温泉つたやの鳥谷隆治郎さんには特にお世話になりました。記して感謝の意を捧げます。

## 第一章 誕生から京都周旋

### 萩城下のこと

江戸時代を通して長州藩（萩藩）毛利家三十六万九千石の本拠地だった萩は、三角州の上に城下町が築かれていた。その北東部に、日本海に突き出すような格好で指月山がある。お椀を伏せたような形をしており、麓には五層からなる天守閣がそびえていた。しかし明治のはじめに藩主居館と共に解体され、現在は石垣を残すのみである。

そこから堀で仕切られた、堀内（三ノ丸）と呼ばれる一角が広がる。かつては

藩主一門や重臣たちの壮大な屋敷が軒を並べていた区域だ。いまも土塀や石垣が続き、当時の面影を残す。重要伝統的建造物群保存地区に指定されている。

東側の外堀を越えると城下で、町筋は碁盤目に画され、かつては豪商や藩士たちが住んでいた。

藩王が使う御成り道が東西に走っており、そこから南に向かって三本の筋が延びていた。それぞれ角にあった豪商名をとおり、西から菊屋横町、伊勢屋横町、江戸屋横町と呼ばれる。

古地図を見ると幕末、この三筋には二十軒ほどの中堅藩士の屋敷が並んでいたことが分かる。



萩城下江戸屋横町。現在も江戸時代の面影を残す。桂小五郎（木戸孝允）の生家の他、高杉晋作や伊藤博文が少年の頃遊び場とした円政寺、蘭医の青木周弼旧宅などが並ぶ。



明治7年に解体された萩城天守閣を6分の1で復元した巨大模型（JR東萩駅前）。

## 江戸屋横町に生まれる

のちに西郷隆盛（薩摩）・大久保利通（同）と共に「維新の三傑」の一人と称される木戸孝允（桂小五郎）の生家は、江戸屋横町の一角（現在の山口県萩市呉服町）に現存する。門前には「木戸孝允誕生地」と刻む石碑が建つ。

木戸孝允は天保四年（一八三三）六月二十六日、藩医和田昌景と後妻清子の中に生まれた。通称は小五郎。父の禄は二十石だったが、民間の治療も行っていたし、貸家などの不動産も所有する裕福な家庭だったようだ。

木戸孝允が生まれた時、父は五十二という高齢だった。すでに和田家では、先



桂小五郎生家（萩市呉服町）。藩医和田家の遺構がいまも残る。医家なので、家人用と患者用の玄関が別々にあるのが面白い。小五郎はこの家で江戸に遊学する20歳ころまでを過ごした。

妻との間に生まれた捨子が婿養子をとって家督を継いでいる。このため彼は八歳の時、桂家に養子に出た。

桂家は家禄百五十石の馬廻り役（八組士・大組士とも呼ばれる）だ。藩主側近を輩出する可能性もある、藩政の実務を担当する階級である。

ところが、養父九郎兵衛の没する直前の末期養子だったため、決まりによって九十石に減らされた。

こうして「桂小五郎孝允」が誕生する。翌年には養父に続き養母も没したので、桂家当主だった小五郎は、生家の和田家で育てられた。



母から薫陶を受ける幼き日の小五郎（中村金蔵『少年木戸孝允伝』昭和9年）。

## ペリー来航

少年時代の小五郎は大柄で体格は立派だったが、病弱でもあったようだ。

藩校明倫館で学び、三歳年長の吉田松陰に師事した。山鹿流兵学師範の松陰とは後年、師弟の枠を越えた、同志としての関係を築く。

嘉永五年（一八五三）九月、江戸の剣術家齋藤弥九郎の長子新太郎が萩を訪れた。

これが契機となり、藩内から五人が選ばれ、江戸修業に派遣される。小五郎は選からは漏れたが、自費での関東遊歴が許された。

こうして新太郎に従い江戸に赴いた小

五郎は、麹町三番町で道場練兵館を開く齋藤弥九郎の門を潜った。やがて頭角を表し、塾頭にまで昇りつめる。

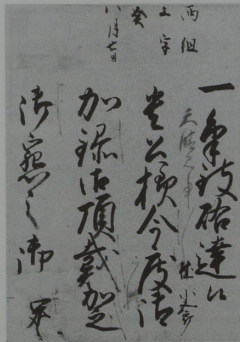
江戸における藩の枠を越えた諸国の若者たちとの交流が、その後の小五郎の活動に大きな影響を及ぼす。

嘉永六年六月、アメリカのペリー提督率いる黒船艦隊が浦賀沖に姿を見せ、高圧的態度で幕府に開国を迫った。

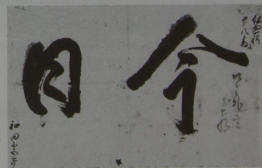
江戸にいた二十一歳の小五郎は、リアルタイムで未曾有の国難を体験する。

小五郎の日記六月四日の条には「今夕アラマシ黒船ノ風評ヲ聴ク」、翌五日の条には「黒船風評次第ニ甚シ。ステニ戌時ヨリ浦賀ニ趣カント欲ス、俄カニ故アリ、行クコトヲ得ス」などとある。さら

11歳の小五郎の習字。「一筆致啓達候」に始まる手紙文を学んだ際のもので、師匠が「天晴見事々々」と朱筆している。襖の下張りから見つかった（萩博物館蔵）。



幼少期の小五郎の習字。右端に師匠が「以之外旨」と朱筆している。襖の下張りから見つかった（萩博物館蔵）。



小五郎が師事した齋藤弥九郎



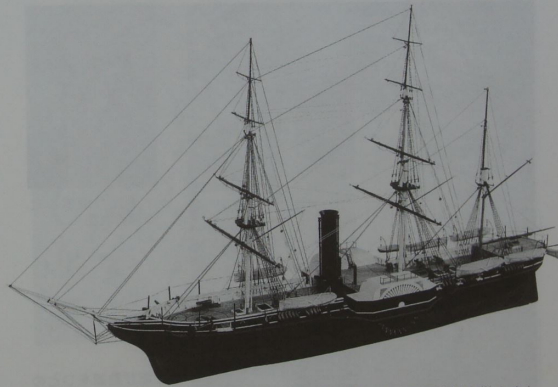
小五郎が塾頭をつとめた練兵館跡（東京都千代田区）。神道無念流の剣術道場で、各地から多くの若者が修業に來ていた。跡地は現在の靖国神社の一角である。

に九日には、大森海岸の警衛を任された藩主毛利慶親（のち敬親）の列に加えられ、その任に就いた。

幕府は翌年の返答を約束したため、ペリーは六月十三日、再来を約して去る。そして外圧に屈した幕府は安政元年（一八五四）三月、日米和親条約に調印する。



幕末の長州藩主毛利慶親（敬親）。



ペリー艦隊の旗艦ポーハタン号の模型（萩博物館蔵）。「泰平の眠りを覚ます上喜撰（蒸気船）、たった四はいて夜も眠れず」と、庶民は幕府の慌てぶりをあざ笑ったという。

### 西洋を学ぶ

黒船騒動を体験した小五郎は、衝撃を受けた。その危機感が、小五郎を突き動かす。小五郎はいたずらに西洋を敵視し、その排除を唱えるのではなく、まず相手を知ろうとする。

菲山代官で西洋砲術の第一人者である江川太郎左衛門に師事。江川の従僕となり、武蔵・伊豆・相模沿岸の防衛視察、測量を見学した。さらに浦賀奉行所の中島三郎助のもとで造船術を学んだり、すばやく時勢に対応し、行動したのだ。アメリカの横暴な態度に憤りながらも、同じく西洋を知ろうとしたのが、吉田松陰だった。



江戸で剣士として成長した小五郎は、黒船来航に衝撃を受け、西洋へ目を開く（少年木戸孝允伝）。

長崎からロシア艦で密航を企てた松陰は、その計画を密かに小五郎に打ち明け賛意を得ている。

結局、松陰は安政元年三月、伊豆下田でアメリカ艦に乗り込もうとして失敗。萩に送り返され、投獄される。やがて自宅で謹慎の身のまま松下村塾を主宰し、近隣の少年たちを指導した。

だが、幕府の開国政策を激しく非難したすえ安政の大獄に連座し、安政六年十月二十七日、江戸伝馬町獄で処刑される。三十歳だった。

小五郎は松陰門下の伊藤俊輔らと共に松陰の遺骸を引き取り、千住小塚原に埋葬している。

アメリカ密航に失敗した  
吉田松陰の肖像（春風文庫蔵）



吉田松陰墓（東京都荒川区回向院。伝馬町獄で刑死した松陰の遺骸を引き取った小五郎らは、小塚原に埋葬した。現在、その跡地に建つ墓石。）

### 攘夷の方針

安政五年六月、幕府は勅許を得ないまま自由貿易を骨子とした日米修好通商条約を締結。これが外国人嫌いで、熱烈な攘夷主義の孝明天皇を憤慨させ、公（朝廷）・武（幕府）間に亀裂が生じた。

文久元年（一八六一）三月、長州藩は藩士長井雅楽の提唱した「航海遠略策」を掲げて公武間の周旋を始める。開国を既成事実として認めた「航海遠略策」は、幕府はもちろん朝廷でも好意的に受け入れられた。

ところが松陰門下生たちは、師の志であつた尊王攘夷で藩を一本化するべきだと、激しい政治運動を展開。天皇を日本



丸往還公園に平成4年に建てられた夜明けの群像より。左より山県有朋、木戸孝允（桂小五郎）、伊藤博文。



の中心とし、攘夷を断行して外圧を撥ね付けよと主張する。

朝廷からの反発もあり、長州藩は「航海遠略策」を引つ込め、長井もまた朝廷を誹謗したとの罪を受け、切腹に追い込まれる。

文久二年七月六日、長州藩主は京都河原町にあった藩邸に、老臣以下を招集し、今後の藩の進路を決めるための御前会議を開く。

周布政之助・中村九郎と共に、朝廷と他藩に対する外交官の役を任せられていた小五郎は、会議に出席。その結果、「航海遠略策」撤回と、天皇の意を奉じて攘夷に尽くすという藩是が定められる。

## 第二章 華々しく活躍

### 外交官として

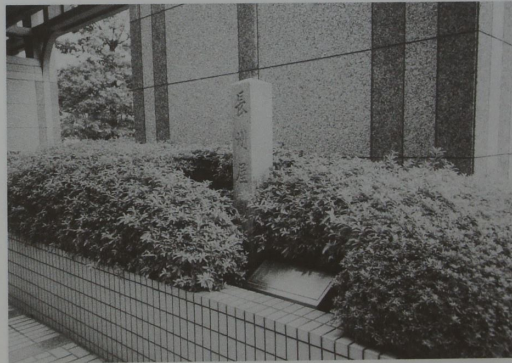
文久二年七月、長州藩は藩論を公武合体から、外国排撃の攘夷へと転換した。さらに閏八月、朝廷も長州藩に促される形で攘夷の方針を定め、九月になり発表する。

長州藩主父子は兵を率いて京都に乗り込み、天杯を受け、朝廷と結び付き、十月には勅使三条実美を江戸に送り、幕府に攘夷断行を迫る。

すでに幕府は、和宮降嫁の条件として、天皇に攘夷実行を約束している。追い詰



江戸城に乗り込んだ勅使三条実美と副使姉小路公知は、下座に將軍家茂を置いて攘夷断行を迫った。逆転した朝幕の力関係がよく分かる（『少年木戸孝允伝』）。



長州藩京都屋敷跡（京都市中京区）。現在の京都ホテルオークラの地。元和5年（1619）、大文字屋与左衛門が毛利家へ献上した。幕末になると朝廷と結びつき、幕府を追い詰める政治運動の拠点となった。しかし元治元年7月、「禁門の変」で敗れた長州藩は自ら火を放ち、退却。跡地は幕府に没収された。

められた將軍徳川家茂は、その条件を修正しようとして、文久三年三月に上洛した。

ところが、長州藩の建議による、攘夷祈願の賀茂行幸に随従させられる。さらには五月十日をもって、攘夷断行の期限とすると、天皇の前で約束させられた。すでに、諸外国との間に、開国の条約を結んでいるにもかかわらずである。

この時期、天皇の權威を背景とした長州藩の勢いは凄まじい。

三十一歳の小五郎は外交官として先頭に立ち、働いた。島原や祇園といった花街に繰り出し、他藩士らと杯を交わして謀議を進めた。小説や時代劇で知られる、三本松の芸妓幾松とのロマンスは、このころの逸話だ。

## 八月十八日の政変

小五郎は、攘夷の不可能は知っている。しかし、幕府の開国政策を非難するスローガンとして、天皇の意志である攘夷を掲げ、新生日本のために団結せねばならぬと考えていた。

そのころ小五郎は「君臣湊川」と、その決意をもらしたという。勅命を受けた楠木正成は、敗れると承知の上で足利尊氏の大軍と神戸湊川で戦い、自決して果てた。正成を自身や長州藩と重ね合わせていたのだ。

さらに小五郎は、攘夷の次には諸外国と日本が対等な立場に立ち交易する、新たな開国の時代が訪れると信じていた。



桂小五郎。役者顔負けの色男で、京の花街でも芸妓たちに人気があったという。



桂小五郎銅像。長州藩京都屋敷跡のホテルオークラの一角に、平成7年、京都桂ライオンズクラブにより建立された。作者は江里敏明。有名な写真をモデルにしている。

そのため、周布政之助らと謀り、井上聞多（馨）や伊藤俊輔（博文）ら五人の若者を、密かにイギリスロンドンに留学させた。

文久三年五月十日の攘夷期限がやって来ると、長州藩は関門海峡を通航する外国船を下関砲台から次々と砲撃する。

君命を受けた高杉晋作（松陰門下生）が、庶民の入隊も許した奇兵隊を結成したのは、この時だ。

ところが、長州藩の暴走を危惧する公武合体派の薩摩藩と、京都守護職の会津藩は、朝廷内の反長州派と結び付く。攘夷を唱える長州などの過激派を、最も嫌っていたのは天皇だったのだ。

そして八月十八日、御所内で政変が起

こった。

これにより、長州藩などが進めていた大和行幸は、事実上中止となった。長州藩の御所警備は解かれ、三条実美ら長州寄り公卿の参内も止められる。

小五郎は、長州に都落ちが決まった三条ら七卿を兵庫まで護衛した後、再び京都に戻り、失地回復のため奔走を始める。

二十六日、天皇は在京の諸侯に詔を下した。

それには「これまで勅命に真偽不明の儀これあり候えども、去る十八日以来申し出で候儀は、真実の朕の存意に候間、この辺、諸藩一同にも心得違いあるべからず」とあり、政変の正当性を天皇自らが認めたものだった。



七卿落ちの図（萩博物館蔵）。雨の中を長州藩を頼り都落ちしてゆく様子を描く。



初代内閣総理大臣になった伊藤博文。



初代外務大臣になった井上。



小五郎らの尽力によりロンドンに送り込まれた秘密留學生。右より伊藤俊輔・山尾庸造（庸三）・野村弥吉・井上馨・遠藤謹助・井上聞多（馨）。

## 池田屋事変

長州藩としては、あくまで天皇の意志であった攘夷の実行に尽力しただけで、功こそあれ、罪などないと考えている。

そこで、弁明書である「奉勅始末」を使者に持たせ、京都に派遣するが、会津・薩摩藩が阻止して、上手くゆかない。

小五郎は九月に一旦帰国。藩主は小五郎を直目付とし、奥番頭格に加えた。さらに元治元年（一八六四）一月には直目付を免ぜられ、再び京都方面へ送り込む。

小五郎は京都で因州藩など長州に同情的な諸藩と連絡をとり、復権の道を探った。

ところが六月五日夜、「池田屋事変」

が勃発。三条小橋の旅宿池田屋で会合していた長州系の浪士らが、京都守護職配下の新選組に襲撃されたのだ。

浪士たちは京都じゅうに火を放ち、その隙に天皇を長州に連れ去ろうと企んでいたというが、確かなことは分からない。

小五郎は間一髪のところを危機を脱したが、吉田稔麿（松陰門下）や肥後の宮部鼎蔵ら七名が斬殺されたり、自決して果てた。また、二十二名が捕縛された。

この弾圧は幕府方の、徹底した態度の表明とも受け取れた。



池田屋内部の古写真。ここで新選組と浪士たちの死闘がくり広げられた。小五郎は間一髪のところを逃れている。



池田屋跡の現在（京都市中京区）。当時は間口3周半、奥行15間、総建坪およそ80坪、客室全体で60畳という京特有の旅籠だったという。

三縁寺の浪士たちの墓（京都市左京区）。昭和54年（1979）、京都三条より現在地に移転。そのさい記録を上廻る15もの頭蓋骨が見つかった。

## 禁門の変で朝敵に

長州藩内では、武力により嘆願を遂げようとする「進発派」が勢いを持ち、京都に上ってくる。こうした激しい動きを、小五郎はもう止めることが出来ない。七月十八日には河原町の藩邸で、京都留守居役の乃美織江や佐々木男也らと別杯を交わした。そして同夜、長州勢は伏見・嵯峨・山崎の三方から御所を目指して攻め寄せた。

翌十九日、嵯峨方面からの九百名が、御所付近で会津・薩摩の軍勢と激突する。後に「禁門の変」とか「蛤御門の変」と呼ばれる戦いである。

長州側は遊撃軍率いる末島又兵衛が戦



御所蛤御門（京都市上京区）。「禁門の変」のさい、御所を守る薩摩勢が長州勢との間に激戦を繰り広げた地。門扉には当時の弾痕が残る。

死、松陰門下の久坂義助（玄瑞）と寺嶋忠三郎が刺し違えて自決、入江九一が戦死するなど、二百人からの犠牲を出し敗走した。

朝廷は御所に攻め込んだ長州藩に、「朝敵」の烙印を押し、藩主父子の官位を剥奪する。また、七月二十三日には幕府に、長州征伐の勅命を下す。

これを受けた幕府は二十四日、西国諸藩に長州征伐を発令し、二十五日には江戸・京都・大坂の長州藩邸を没収した。

このようにして長州藩は、日本の中で完全に孤立したのである。



久坂玄瑞



京都市東山区霊山に並ぶ、「禁門の変」における長州側死者の墓。後年、元勲となった小五郎（木戸孝允）も、自らの希望によりこの地に葬られる。



寺嶋忠三郎

### 第三章 但馬潜伏

#### 出石を目指す

「禁門の変」で長州勢が敗れるや、小五郎はひそかに京都を脱し、再起をはかろうと決意する。

小五郎は剣士でもあった。だから冷静な判断力を、つね目ころから磨いており、つまらぬ意地を張って大死にするのを嫌ったのだ。「逃げの小五郎」と揶揄されたゆえんである。

小五郎は乞食に身をやつして、京都市街に潜伏し、脱出の機会をうかがった。すでに、新選組などによる長州人狩りが



敵に取り囲まれながらも脱出をはかる小五郎  
〔少年木戸孝允伝〕。



新選組局長近藤勇は、京都に潜伏する小五郎ら長州人の捕縛に執念を燃やした。

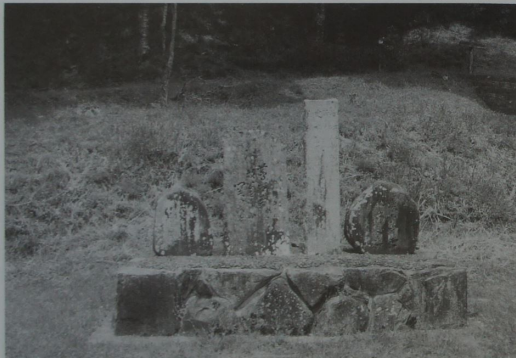
始まっている。捕らえられ、非業の最期を遂げた同志も少なくない。

数日後、小五郎が目指したのは但馬出石である。

手引きしたのは出石出身の、広戸甚助なる商人だ。

京都に出ている甚助は時勢に関心を強め、河原町の対馬藩邸に出入りするうち、小五郎と面識をもつ。対馬藩と長州藩は藩主同士が親戚で、交流も頻繁だった。

甚助は小五郎を船頭姿に変装させ、但馬国居組村の卯左衛門と名乗らせる。そして京都を脱し、各地の関門を無事通過して、七月三十日、丹波・但馬の国境である久畑村（現在の兵庫県豊岡市丹東町）の関門にさしかかった。出石城下へは四



久畑の関所跡に建てられた小五郎に関する石碑。左から2基目が木戸忠太郎歌碑、右端が徳富蘇峰書句碑。

里半（十八キロ）ほどの地点だ。

どうも怪しいと感じた出石藩の役人長岡市兵衛と高田十郎左衛門は、小五郎を捕らえようとした。そこへ後れて甚助が到着し、懸命になって弁解する。役人と甚助は旧知の間柄だったので、

「お前が言うのだから間違いないだろう。よし」

と、関門を通過させてくれた。

現在、久畑の関門遺構はほとんど残っていないが、小五郎を記念する石碑が四基も並ぶ。そのひとつには、明治から昭和にかけて活躍した徳富蘇峰（猪一郎）の書。

「凌霜耐雪、松菊長存」

を刻む。雪に耐え忍んだ松と菊が、大

小五郎の但馬潜伏中の苦難を偲んだ徳富蘇峰書「凌霜耐雪、松菊長存」  
（木戸松須公遺集）。

凌霜耐雪  
松菊長存

蘇峰三翁題



きく成長したとの意味だろう。「松菊」は小五郎が好んで使った号。蘇峰の語はそれに引っかけ、但馬の山間に潜伏した苦難の時期を偲ぶものだ。

小五郎はその日黄昏、室埴村寺坂集落にあった茶屋の松屋に投宿した。現在、国道四二六号沿いの民家前には、次のように刻む石碑がある。

「維新史蹟」

木戸孝允公遺蹟

当時桂小五郎

久畑関所の危かりし糾問を免がれて

黄昏松屋に着き投宿、未明出石に向ふ

茶屋松屋敷跡」



小五郎が投宿した松屋跡



松屋跡に建つ石碑

## 出石という城下町

松屋の脇から鯉山峠を越せば、出石城下だ。小五郎が歩いたであろう旧道がいまも残る。曲がりくねった山道を上り、そして下ると、城下の東側に出る。

肥沃な盆地である出石は、但馬地方の政治・経済の中心地として古くから栄えた。

出石藩主は小出、松平（藤井）氏と変わり、宝永三年（一七〇六）からは信州上田から移封された仙石氏（外様大名）の城下となった。そのさい信州から持ち込まれたのが、出石名物の「そば」だ。

仙石氏として三代の藩主仙石政辰は、

陶磁器の生産を奨励し、古くからの養蚕・生糸・絹織物とともに藩の重要な産業とした。さらに安永四年（一七七二）には儒学者桜井篤忠に命じ、学校を創設する。

四代の久行はこれを拡張し、藩校弘道館を開き、藩士たちに文武を奨励した。元来、江戸の初頭に沢庵和尚を輩出するなど、出石は学問好きの土地柄なのだ。

石高は五万八千石だったが江戸後期、六代政美の時に「仙石騒動」と呼ばれる御家騒動が起こり、天保六年（一八三五）、三万石に減封された。



小五郎が不安な気持ちで越えたであろう出石城下に通じる鯉山峠。



出石藩仙石氏の牙城である出石城は現在公園になっていて、小五郎の潜伏地からは目と鼻の先だ。



出石名物の血そば。藩主仙石氏が信州上田から持って来たとされ、現在も出石の経済を支えている。



## 出石城下の石碑

甚助は小五郎よりひと足先に出石に入った。そして家を継ぐ弟直蔵に、小五郎の潜伏につき相談する。

直蔵はかつて江戸に赴く途中、京都で小五郎に会ったことがあり、その人柄を知っていたから、ただちに賛成した。直蔵は後年、「公（小五郎）謙遜身ヲ持シ、素行儀正シク、凡人ナラザルヲ以テ人一度公ヲ見レバ敬礼尽サルナシ」と述べている。他人が懸念に尽くしたくなるような魅力が、小五郎にはあったらしい。

江戸兄弟が小五郎を最初に匿ったのは、江戸家の旦那寺である昌念寺だ。町はずれの高台にあり、市街が見渡せる。

ここで小五郎は、出石藩士堀田反爾と知り合い、囲碁を打ったりして退屈をしのいだ。維新後、元勳「木戸孝允」となった小五郎は、東京で堀田と再会している。当時の建物は明治九年（一八七六）の大火で焼失し、現在の本堂は大正のころの再建だ。また境内には戦前、木戸公記念館が建てられたが、これも現在は無い。さらに小五郎は、出石城下の寡婦かふの家に匿われた時期もあったと、直蔵は後に書き残している。

こうした江戸兄弟の苦心を記念するかのように、碁盤の目のように割れた出石城下町のあちらこちらに、後世「桂小五郎」の名を刻んだ石碑が設置されてゆく。

いまでも田結庄の角屋喜作宅跡・畳屋茂

江戸家の旦那寺である魚屋町の昌念寺。小五郎が最初に匿われた。かつては木戸公記念館もあった。



江戸直蔵（右）と藤戸帰一。明治四年撮影（木戸松菊公遺芳集）。



七宅跡・広戸喜七宅跡・青田の塩屋重兵衛宅跡・広江屋荒物店跡・魚屋の昌念寺の六カ所に、小五郎潜伏の史実を伝える石碑を見る。四百メートル四方にも満たない、狭いエリアだ。その中を用心深く、転々とした様子がうかがえる。

しかし一方で、賑やかな城下町の中心地に潜んでいたというのは大胆不敵であり、驚かされる。人を隠すのは人ごみの中と言うが、それを実践したのでろう。

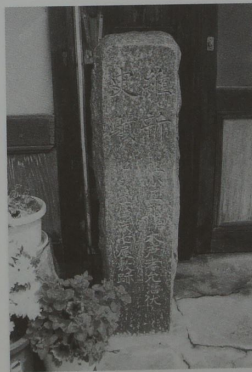
あるいは出石藩は、小五郎の正体を知っていたのかもしれないと説がある(村松剛『醒めた炎』)。弘道館は全国でも珍しく、皇学を正科としていた。出石藩には長州藩の尊王というイデオロギーに、一応の共感があったのではないかと、

のだ。

これらの建碑は、幕末から数十年後の昭和初期に行われている。身分を偽っての潜伏だから、公式記録は存在しないが、当時を知る人が存命していたのだから。この時点で建てておかねば、風化した可能性の高い史実だ。

出石は明治九年(一八七六)の大火で全建物の五分の四が焼失してしまった。唯一焼け残った鍋屋も現在は失われ、小五郎ゆかりの家屋は残念ながらひとつも現存していない。

小五郎が潜伏した田結庄町の疊屋茂七邸跡。



出石に入った小五郎が最初の日に潜伏した田結庄町の角屋喜作邸跡。

小五郎が潜伏した青田町の志水(塩屋)重兵衛邸跡。



小五郎が潜伏した田結庄町の鍋屋(広戸)喜七邸跡。小五郎と喜助の祖父喜七は父子のように交流したという。

## 養父や湯島にも逃れる

やがて出石にも、京都から守護職の会津藩が、長州人詮案せんあんにやっつて来るとの噂が立つ。

この時はどうも噂だけだったようだが、用心深い小五郎は養父市場やぶいちば（現在の養父市）の西念寺へ移り、寺男に化けて息をひそめた。ここは、出石から直線距離で十数キロメートル離れている。牛の市が立つことで知られ、寺のすぐ北側には代官などが泊まる陣屋があった。

旧街道に面する西念寺は、幕末当時の本堂が現存し、昭和八年（一九三三）七月に建てられた、

「維新史蹟

## 当時桂小五郎

### 木戸孝允公潜伏遺跡

元治元年蛤門の変出石に入り潜伏、

時々幕吏の来りて公を物色するあり、

万一を憂ひて此寺に來り寺男となりて

人目を避けたる遺跡

と刻む石碑もある。

碑の除幕式に参列した息子の木戸忠太郎は、

「幕除れて碑名に松の風薫る」

の俳句を作った。

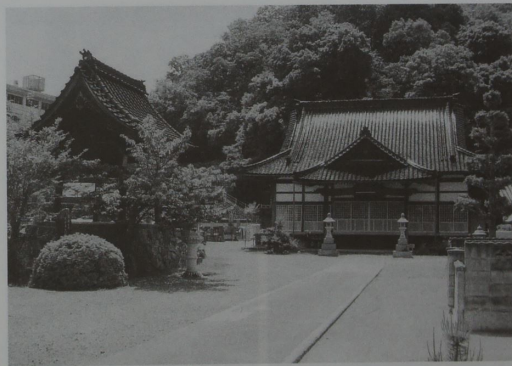
あるいは小五郎は、出石から湯島村（現在の豊岡市城崎町）の温泉に出かけたりした。

養老元年（七一七）、道智上人により開かれたとされる、現在の城崎温泉だ。

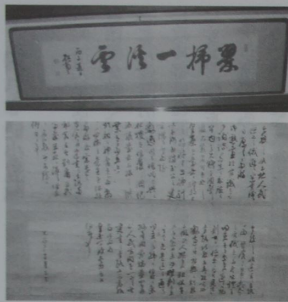
西念寺の小五郎潜伏を伝える碑。



昭和八年、西念寺を訪れた小五郎の忘れ形見木戸忠太郎（左から4人目、「木戸松菊公遺芳集」）。



養父市場の西念寺本堂は、小五郎潜伏当時の面影を伝える。



現在のつたやに所狭しと飾られている小五郎の遺墨。

口県(秋市)の「長州秋市松陰神社総代・元貴族院議員 滝口吉良」だ。  
 また、昭和三十八年(一九六三)春、作家司馬遼太郎が「竜馬がゆく」希望の章執筆のため、一週間ほど滞在した宿でもある。司馬の色紙などが、客室内にさりげなく飾られていたりする。



つたや(松本屋跡)には滝口吉良書を刻んだ史跡を示す石碑が建つ。



城崎温泉街。小五郎が泊まったのは松本屋。現在跡地にはつたやが建つ。

と刻む石碑がある。  
 直藏の息子広正蔵の尽力もあり、昭和八年三月、出石郡教育会が建てた。碑の文字を書いたのは、小五郎と同郷(山

松本屋敷遺蹟

「維新史蹟、木戸松菊公遺蹟」  
 当時の建物は、大正十四(一九二五)年の北但大震災で失われたが、玄關脇には、

「ここで小五郎が泊まったのは女主人の松本屋で、なんと代官所の向かいに位置していた。旅館に内湯はなく、小五郎も外湯(当時は三カ所にあった)を使ったと思われる。」  
 松本屋は明治のころ鳥谷家が譲り受け、現在は旅館つたやとして営業している。

### 帰れない小五郎

元治元年後半は長州藩にとり、未曾有の国難が続く。

七月の禁門の変で敗れ、八月には下関に攻め寄せた四方国連合艦隊と戦い敗れた。さらに勅を奉じた幕府征長軍が迫る。

大混乱の中、長州藩では政権交代が起こった。それまで攘夷路線を進めて来た「正義派」に代わり、征長軍に恭順謝罪を唱える「俗論派」が台頭し、政権を握ったのだ。失脚した「正義派」の要人たちは、次々と刑場の露と消えていった。

出石に潜伏する桂小五郎も、「正義派」の中心人物のひとりである。帰国すれば内紛の中で、殺されるしかない。小五郎

には帰る場がなかったのだ。

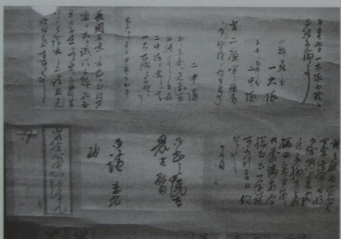
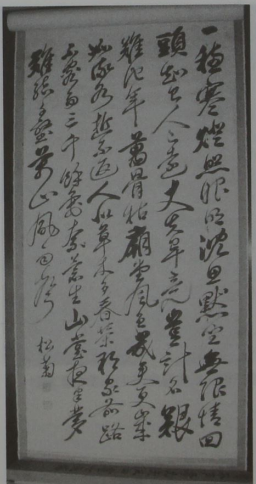
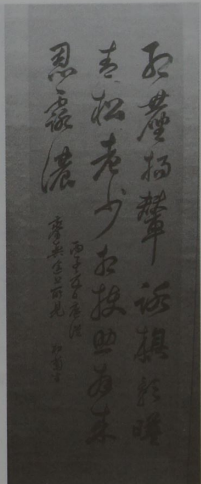
小五郎は同年三月に尊王攘夷を唱え奉兵した、水戸天狗党への参加を考える。が、天狗党は十二月に壊滅してしまい、またもや小五郎は行き場を失った。

悲しい知らせを受けるたびに小五郎は「悄然大息セラレタリ」だったと、直蔵は記す。あるいは、

「かりそめのゆめとききたきこ、ちかな」と、その心境を詠じている。

一方、兄の甚助は小五郎の手足となり働き、長州や対馬、京坂を往来してはその形勢を探った。

つたやに師らわれている桂小五郎（水戸孝允）遺墨の故々。ここで書いたものではなく、先代の収集品が主だったが、貴重な史料も多く仕巻である（次頁七）。



## 再生の地

やがて小五郎が腰を据えたのは、出石城下菅田町の一角である。現在は昭和七年十二月建立の石碑、

「維新史跡、勤王志十柱小五郎再生之地」が建つ場所だ。高さ二メートルほどであり、付近に建つどの小五郎関係の石碑よりも大きい。

ここにあつた間口三間半の借家で小五郎は商人に身を変え、荒物屋を開いた。商売でもしなければ、城下への定住が認められないからだ。

営業許可を取り付けてやったのは、江戸家の親戚にあたる志水重兵衛である。新たに江戸家の別家を作り、小五郎はそ

この当主となった。広江孝助と名乗り、屋号を広江屋とした。開店は大晦日で、竹細工や米を売っていた。

広戸兄弟の妹で十三歳の「すみ」は、小五郎の身辺の世話をした。すみは野山へ出ては芹を摘み、油揚げに交ぜて食膳に出した。小五郎はこれを毎日、飽きることなく喜んで食べ続けたという。

出石で身動きがとれなくなった小五郎は、酒造業を始めようと考えたこともあった。長州から塩を輸入し、一手に隣国へと売りさばく。長州の船舶を常につなぎ止めておけるため、一朝事有る時の役に立てる計画だ。

慶応元年の正月が来ると、小五郎は付近の子供たちを集め、花合せという「賭



盛大に行われた「再生之地」記念碑除幕式（『木戸松菊公遺芳集』）。



菅田町の一角に小五郎は荒物屋を開いた。跡地には現在、碑が建てられている。

博」をして遊んだ。もともと金銭を賭けるのではなく、遊戯が終われば勝負の如何にかかわらず、平等に菓子を与えた。このため子供たちは、争うように小五郎の店に押しかけたという。

現在、古い商家の建物を利用した豊岡市立出石史料館には、珍しい小五郎遺墨が額となり掛かっている。

出石藩が発した儉約の触書きを、慶応元年一月、名主太田忠兵衛に頼まれ、小五郎が代筆したものだ。他にも触書きなどを代筆したという。

出石の荒物屋に化けてはいたものの、小五郎はインテリとして周囲から尊敬されていたのが分かる。

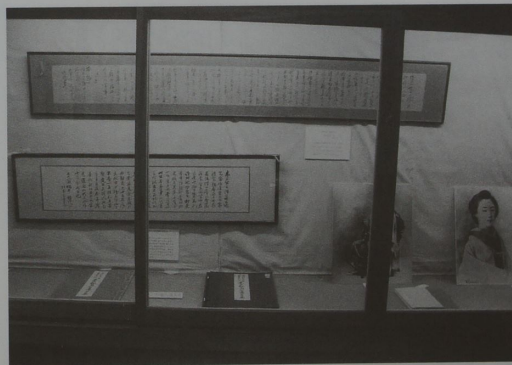
また、驚かされるのは、十月月足らず

の但馬潜伏中における盛んな女性関係だ。

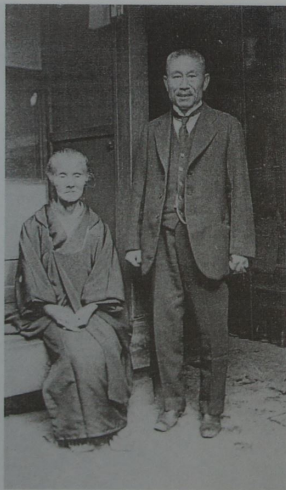
まず、小五郎を匿った大恩ある広戸兄弟の妹で、十六歳の「みね」と結ばれている。彼女はのち、小五郎の男児を生む。この子が忠太郎だ。

あるいは湯島で世話になった旅館松本屋の一人娘「たき」を妊娠させたが、流産に終わった。

他にも湯島の芸者に手をつけたなど、真偽は別にして艶聞には事欠かない。



出石史料館の小五郎コーナー。上段が儉約の触書きを、小五郎が代筆したもの。



小五郎の忘れ形見木戸忠太郎（右）と橋八重（木戸松久公遺芳集）。

## 長州へ帰る

長州藩では元治元年十二月、高杉晋作の下関挙兵が始まる内戦のすえ、「俗論派」が斥けられ、「正義派」が復権した。そして幕府に対し、表では恭順するが、裏では着々と対決の準備を進めるといふ「武備恭順」の方針が定められる。

こうして長州藩では、小五郎という人材が必要になってきた。

慶応元年三月、小五郎に頼まれ、長州に情勢探索に赴いていた広島甚助が、出石に帰って来た。

甚助は、小五郎の愛人幾松を伴って来る。驚く小五郎に、幾松は長州藩の情勢を聞かせた。

幾松は、京都三本松の芸妓だ。小五郎が京都から脱出した後、うまく長州まで逃れたのだ。長州では、小五郎の潜伏先を知るのは村田蔵六（大村益次郎）や伊藤俊輔（博文）ら数名に過ぎない。

甚助に会った村田は、幾松を出石に連れて行き、小五郎に帰国を促して欲しいと頼んだ。

こうして小五郎の帰国が、決まる。但馬を去るにあたり小五郎は、幾松を連れて湯島に赴き、しばらく滞在した。その時、

「朝霧の晴れ間はさらに富士の山」と、宿の板戸に戯れ書きしたのが残っていたが、大正十四（一九二五）年の大震災で焼失したという。



高杉晋作は吉田松陰門下の俊才。小五郎を兄のように慕う。上海に渡航して欧米列強の脅威を痛感し、奇兵隊を結成した。下関挙兵により藩の主導権を奪うも、慶応三年四月、二十九歳で病没した。



後年の松子

錦絵に描かれた幾松（萩博物館蔵）。床下に隠れた小五郎のため、握り飯を運ぶ姿を描く。明治23年に出た「教導立志基」の一枚で、幾松もまた維新物語の中でヒロインとなり親しまれていたことが分かる。



これを日本最初の新婚旅行と、見る向きもある。

近年、坂本龍馬夫妻が慶応二（一八六六）年三月、薩摩に逃避行したのが最初とされるが、小五郎の方が一年も早い。ただしいずれも本人らは命がけの逃走であり、西洋流の新婚旅行といった意識はないだろう。

小五郎と幾松が出石を出発したのは四月八日だ。甚助が同行し、養父経由で南下して大坂に向かった。大坂では先行していた弟直蔵が、合流する。

ところが大坂市街で兄弟は、幕府役人の尋問を受けてしまう。甚助はすすんで捕らえられ（数日後に釈放）、その隙に直蔵を逃がした。

これを知った小五郎らは、ひとまず難波橋の対馬藩邸に逃れる。そして四月十七日夜、下関の茶屋平五郎の持ち船に乗り、大坂を出船した。

幕府が設けた川口の関所では尋問を受けたが、小五郎は自分は京都宮川町の広江孝助で、直蔵は弟、幾松は女中だと言いつ張る。役人は大声で「よし」と認めため、船は神戸沖へと出た。

ここで小五郎は、緊張が緩んだらしい。「早最善シ」と、その口から初めて長州弁が出たと、直蔵が書き残しているのが面白い。

それから一行は、神戸湊川の楠木正成墓所へ参った。かつて、長州藩が天皇の意を奉じて攘夷路線を突き進むにあつた



但馬よりの帰路、小五郎は湊川の楠木正成墓所へ参った（『少年木戸孝允』）。

現在の楠木正成墓所。明治5年（1872）に湊川神社が造営され、今日に至る（神戸市中央区）。



小五郎が潜伏した出石城下の町並み。



出石のシンボル辰鼓楼は明治4年、見張り櫓として城の大手門に建てられた。現在は時計台として親しまれている。

り、小五郎は「君臣湊川」と、その決意を述べた。

しかし、敗死した正成と違い、小五郎は生き抜いて長州藩に復帰することが出来た。四月二十六日、下関に着いた小五郎は、ひそかに桶屋久兵衛宅に投宿する。翌朝、訪ねて来た伊藤は、小五郎の顔を見るや両眼に涙を浮かべた。それから刺客の危機を避けるため、小五郎は越町の境屋新三郎方に居を移した。

ここを訪ねて来た村田らに、小五郎は防長一州の団結や、民政・軍制の整理爾正が最急務であると説く。

山口の藩政府は、小五郎を呼び出し、その意見を求めた。こうして五月二十七日、小五郎は政事堂内用掛国政方用談役

心得となり、藩政府の第一線に立つ。

伊藤は直蔵を稲荷町の大坂屋で饗応した。やがて虎口を脱した甚助も、下関にやって来た。

直蔵は但馬に帰ったが、途中、四国琴平の金毘羅社に参り、そこで偶然、高杉晋作とその愛人おうのに出会う。晋作は下関開港を唱えたため、反対派から生命を狙われて逃避行中だったのだ。やがて長州に帰り、小五郎と共に新体制を築いてゆく。時代は大きく転換しようとしていた。

小五郎は出石潜伏中の変名を、甚助に与えた。よって甚助はこの後、広戸孝助と名乗るようになる。



桂小五郎（前列右から2人目）と同志たち。後列右端は伊藤俊輔（博文）。和洋入り交じった服装に、幕末維新という過渡期が感じられる。



山口政事堂藩庁門（山口市滝町）。長州藩は秋よりも地の利を得た周防山口に居城を移し、攻め寄せる征長軍に備えた。小五郎はここで官僚のトップに立ち、藩政・軍政改革に腕を振るった。政事堂跡は現在、山口県庁。

## 第四章 生彩を失った晩年

### 木戸姓となる

小五郎は慶応元年（一八六〇）九月、藩命により木戸寛治（のち準一郎）と名をあらためた。諱の孝允はそのままで、幕府からの追及を逃れるのが目的で、同時に高杉晋作も谷潜蔵とあらためている。

翌二年一月、木戸は君命を受けて京都に上り、西郷隆盛や小松帯刀らと密議を重ね、薩摩藩との提携を果たす。幕府独裁に批判的な薩摩藩は長州藩復権のため、協力すると約束してくれた。



ひそかに京に入った小五郎は、薩摩藩邸に潜伏し、密議を進めた。今出川通に面して残る当時の屋敷門。



文久二年（一八六二）に設けられた京都市の薩摩藩邸跡は現在同志社大学と名がついている。（京都市上坂区）

同じころ、幕府は朝廷から長州処分允許を取り付けている。長州藩主父子の蟄居、十萬石削除という、幕府としては最大の譲歩案だ。

ところが長州藩はこの条件を蹴り、その年六月、第二次幕長戦争（四境戦争）が勃発する。木戸は戦場に出ることはなかったが、近代的な官僚制度を築いた藩政府の中心で、腕をふるった。

征長軍は各地で敗北を重ねる。そして七月二十日、將軍家茂が大坂城で病没。九月には宮島で休戦協約が締結される。

さらに十二月二十五日、孝明天皇が崩御。翌三年十月、將軍慶喜は大政奉還を言い、十二月九日、王政復古の大号令が発せられた。

山口藩討推（山口からこい、とこに推し）の跡。ここに孝允の政事堂、維新を推した。木戸市糸米。



木戸神社（山口市糸米）旧宅地の隣接地に明治19年（1886）創建された。文武両道の神として「木戸孝允」は崇敬されている。

## 病魔との戦い

長州藩父子から朝敵の汚名が除かれ、「明治」という新時代がスタートした。

維新の元勳となった木戸孝允は、新政府で参事、参議といった要職を歴任する。

ところが版籍奉還後の方針や、清国や朝鮮への使節派遣など、木戸が打ち出す政策はタイミングが悪く、うまく行かない。面白くない木戸は何度も辞職を願っているが、受理されぬ場合が多かった。

明治四年には岩倉遣欧使節団に副使として参加。当初は幕末に締結された不平等条約改正の予備交渉が目的だったが失敗し、以後は欧米諸国の制度・文物を視察して帰国する。



染井別邸に行幸する天皇（少年木戸孝允伝）。



心身共に疲れきった木戸は、染井の別邸に親しい友を呼んだり、近くの六義園を散策したりした。現在跡地は碑を見るのみ（東京戸豊島区駒込1）。

明治六年のいわゆる「征韓論争」では大久保利通らと結び、西郷隆盛らと対立したが、病気のため途中でリタイアしてしまう。

続いて大久保が唱えた「台湾征討」にも内治優先、時機尚早を掲げて反対。ところが政府内で飛ぶ鳥を落とす勢いの大久保に、とても太刀打ち出来るような健康状態ではない。「台湾征討」が実現されるのを横目で見ながら、大久保批判を日記に綴り、一旦政府から去ってしまった。

明治八年二月の「大阪会議」で、木戸は大久保に、三種分立の実施を認めさせ、政府に復帰する。

だが、病魔との戦いは続く。



岩倉遣欧使節団。左より副使木戸、同山口尚芳（佐賀）、岩倉、副使伊藤博文（長州）、同大久保利通（薩摩）。



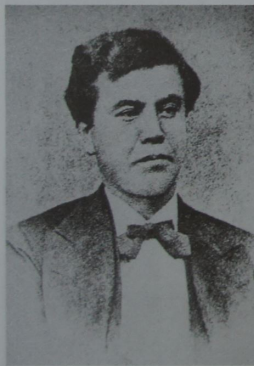
岩倉使節団は不平等条約改正には失敗するが、元勳らが欧米諸国を知る好機となった。（『少年木戸孝允伝』）。

その終焉

明治十年二月二十五日、下野していた西郷隆盛が薩摩の不平士族に擁されて、「西南戦争」を起した。

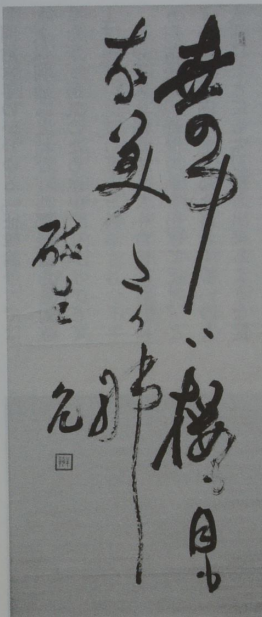
木戸はこれを、大久保から政府の主導権を奪回する好機と考えたようだ。みずから兵を率いて鎮圧に赴きたいと願っていたが、容れられなかった。もし木戸の希望が叶っていても、現実には無理だったろう。そのような体力は残っていなかったのだ。

京都で病床に伏す木戸は、次々と送られて届く電報で戦況を知る。三月二十日、政府軍は田原坂で薩摩軍を撃破し、戦争は山場を越した。だが木戸も、みずから

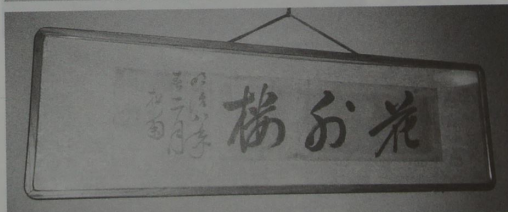


維新の元勳となった小五郎こと木戸孝允。断髪したのは明治4年10月だった。

明治十年一月、天皇の大和・京都巡幸に従うが、またもや京都に着いた途端、持病が出てしまつた。  
「途中より胸背を痛み、夜に入りしはしば甚しく、甚困却せり」と日記に記している。



木戸孝允俳句書。「世の中は桜も月もなみだかな」。明治元年12月21日、東京での作。「酔生允」と署名する(春風文庫蔵)。



大阪会議の成功を記念し、会場となった北浜の料亭加賀伊は「花外楼」と改名。名付け親の木戸は、額を書いた(大阪市中央区)。

の死が迫っているのを、自覚せねばならなかった。

四月二十三日には、特に病苦がひどかった。伊東方成・岩佐純や西洋人医師も来診したが、翌二十四日になっても胸痛は治まらなかった。

死を覚悟した木戸は、東山靈山りよせんに骨を埋めて欲しいと願う。霊山には先に逝った来島又兵衛や久坂玄瑞、坂本龍馬など同志の墓が並ぶからだ。

「桂小五郎」の名で、最も輝いた日々への思いが、木戸の脳裏から離れなかったのだろうか。

木戸の病が重いを知った天皇は、五月十八日、親しくその邸（現在の京都市中京区）を慰問し、

「朕深くこれを憂ふ、それよく保護を加えよ」と、勅語を与えた。

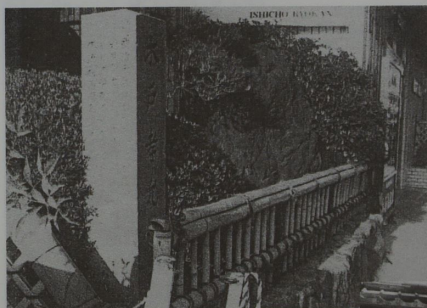
感激した木戸は合掌し、涙を流し落としながら、車駕が去るのを見送ったという。

ある夜、突然眠りから覚めた木戸が「西郷もまた大抵にせんか、予今自ら赴きて之を説諭すべし」と、怒鳴ったという逸話はよく知られる。

五月二十六日他界。享年四十五。遺骸は東山靈山に埋葬された。



木戸孝允墓（左）と松子夫人墓（下）。木戸は遺言により、先に逝った同志たちが眠る東山靈山に葬られた。「内閣顧問勲一等贈正二位」の肩書きがいかめしい（京都市東山区）。



夫を失った松子は髪を下ろし、琴香院と号し、元長州藩控え屋敷で余生を送った。現在は料亭松松として営業している（京都市中京区木屋町通り）。



木戸孝允終焉の邸跡は現在、石長旅館や職員会館かもがわの地である。京都市中京区土手町通り竹屋町下ル東側。もと近衛家の所有だったが、明治9年に木戸が購入し、別邸としていた。

萩を知ろう！萩を楽しもう！萩を伝えよう！

■シリーズ「萩ものがたり」既刊タイトル

タイトル名	著者	定価
①萩の椿	吉松 茂	600円
②高杉晋作100問100答	一坂 太郎	500円
③萩開府—毛利輝元の決断—	知 紀	600円
④萩まちじゅう博物館	徳 明	600円
⑤松陰先生のことば—今に伝わる志	小学校 (監修)	500円
⑥密航留学生「長州ファイブ」を追	ゆう	600円
⑦萩と日露戦争	太 郎	500円
⑧萩の巨樹・古木	隆 司	600円
⑨吉田松陰と現代	周 一	600円
⑩萩沖の魚たち (春・夏編)	堀 成夫	600円
⑪萩の史碑	太 郎	500円
⑫山田顕義—法治国家への歩み	香 乃	600円
特別編 ますらをたちの旅【長州フ	太 郎	1300円
⑬川柳中興の祖—井上剣花坊	雄 (監修)	600円
⑭高島北海 HOKKAI 萩とナンシー	のぶ子	600円
⑮桂小五郎	一坂 太郎	500円
⑯萩沖の魚たち (秋・冬編)	中澤さかな/堀 成夫	600円

販売所／萩博物館・萩市観光協会・明屋書店・道の駅・市内のホテル旅館・萩市役所受付など  
 ※郵送でのご購入は、萩ものがたり事務局まで電話・FAX・Eメールでお申込みください。

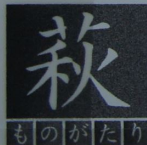
萩ものがたりは、定期購読ができます。

年会費2,000円にて、年間4タイトル(4・10月発行)を定期配本。

\* 定価割引の特典があり、確実にお手元に、送料は無料!

お申し込み方法 ハガキ・FAXでの申込み 住所、氏名、電話番号をご記入ください。  
 電話・インターネットでの申込みもお受けします。

会費のお支払い方法 申込みと同時に郵便振替用紙をお届けします。  
 銀行からの口座引き落としもできます。



有限責任 萩ものがたり  
 中間法人

〒758-8555 山口県萩市大字江向510番地

TEL 0838-25-3233 FAX 0838-26-5458

http://www.city.hagi.yamaguchi.jp/portal/book/booklet.html

E-mail story@city.hagi.yamaguchi.jp

落丁本・乱丁本は発行所宛にお送り下さい。送料発行所負担にてお取り替えいたします。

刊行のことは

山口県萩市は、本州西端に位置し日本海に面します。江戸時代は毛利三十六万石の城下町として栄えました。幕末には吉田松陰をはじめ多くの逸材を輩出した明治維新胎動の地として知られています。

このようなことから全国に例をみない近世の都市遺産、明治維新関係史跡や史料、近代日本の礎を築いた多くの人物に加え、北長門海岸国定公園の自然美など「宝物」ともいべき資源に恵まれています。

しかしながら、明治維新は風化しつつあると言われるように、かつては萩に伝承されてきた物語などが消えつつあります。

毛利輝元が安芸の国(広島県西部)から萩の地に移封され、開府してから、平成十六年(二〇〇四)は四百年の節目となります。

そこでこれを機に、萩に残る厚みのある歴史文化・人物、豊かな自然、多彩な行事や風物、民間伝承、伝統産業など、後世に語り継ぐべき萩のすべてをブックレット・シリーズ「萩ものがたり」として定期的に刊行し、後世に伝承するとともに、全国に向け発信することとしました。

読者の皆様が、この小冊子を活用され、萩の素晴らしさを楽しみ、理解する一助となるよう願ってやみません。

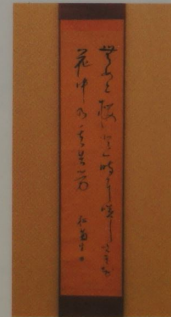


《著者紹介》  
 一坂 太郎

昭和四十一年兵庫県生まれ。大正大学文学部史学科卒業。東行記念館学芸員を務めるが同館閉館により退職。現在著述業。萩市特別学芸員(萩博物館高杉晋作資料室長)、防府天満宮歴史館顧問、山口福祉文化大学教授を務める。最近の著書に『東海道新幹線歴史散歩』『幕末歴史散歩・京阪神篇』『同・東京篇』『長州奇兵隊』以上、中公新書、『松陰と晋作の志』(ベスト新書)、『高杉晋作』(文春新書)などがある。

定価 500円 (本体476円+消費税24円)

幕末、長州藩が危機に瀕した時、桂小五郎は身分を偽り但馬に潜伏した。周囲からは逃げの桂小五郎と揶揄されたが、再生を果たし小五郎は維新の元勳木戸孝允として日本の近代化に大きな足跡を残す。いまリダーに求められているのは、耳ざわりのいい言葉よりも、小五郎のような良い意味でのずるさなのかも知れない。但馬時代を中心に写真で小五郎の足跡を追う。



萩市立萩図書館



110931904

9

萩

Vol. 15

写真集 桂小五郎

2007年10月1日 第1刷発行

著者 一坂太郎

発行者 野村興兒

発行所 有限責任中間法人 萩ものがたり

印刷 有限会社マシヤマ印刷

ものがたり